

日本・マレーシアの食事場面における母親の意識比較

文京学院大学大学院 内田雅子

A Comparison Japanese and Malaysian Mother's Attitude toward Socialization of Eating Habit

Bunkyo Gakuin University UCHIDA, Masako

この研究の目的は日本とマレーシアの食事場面における母親のしつけ意識を比較検討することである。調査は質問紙にて、日本及びマレーシアの都市部に在住する3～6歳の子どもを持つ母親に行った。マレーシアは日本より子どもへの経済的期待を高くもつ結果を示した。また、子どもへの期待の差と共に、食事の母から子へのコミュニケーション願望の違いを示した。マレーシアの母親は食事のコミュニケーション願望は低く、日本の母親は高い結果を示した。さらに食事の育児において、日本人の母親はマレーシアの母親より個人時間の願望が高く、母親の育児役割意識は低いことを示した。3文化（日本、マレー人、中国人）の比較では、母親のしつけ方略や食文化伝達意識は異なることを示した。

【キー・ワード】日本・マレーシア比較，母親役割，幼児，食教育

The present study compares Japanese and Malaysian mother's attitude toward socialization of eating habit. I examined mothers by questionnaire who had 3-6 years old children in living Japan and Malaysia urban areas.

The results were as follows :

- ・ Malaysian mothers who expected their children economic support is higher than Japanese mothers .
- ・ Malaysian and Japanese are different that it desire to communicate from mothers to children at the meal time. Malaysian mothers is lower than Japanese mothers.
- ・ Japanese mothers who desire to individual time have higher than Malaysian mothers its.
- ・ Parental role recognized in Malaysian mothers compared to Japanese mothers.

3 type cultures (Japanese, Malay, Chinese) have different from these 2 points.

1.How to discipline. 2.Desire to communication of food cultures.

【Key Words】 MALAYSIA-JAPAN comparison, Parental role, Infant, Food education

問 題

1. 問題

子どもにとって「食」の機能は、生理的・社会的・情緒的発達を促す要素をもつ。これらは発育や身体的能力、社会的行動や集団適応能力、基本的信頼感や安定感と意欲などをはぐくむ利点をもっている。そして更に子どもの自立・自律性を促している（生野，1988）。子どもの「食」の機能における生理的・社会的・情緒的発達は発育が進むにつれてその度合いは変化する。外山（1990）は、幼児と母親の食事場面では、年齢が上がるにつれて、食物を摂取させる生理的意味合いの強い場から、コミュニケーションを行い、会話を楽しみながら楽しく食事をするという文化的あるいは社会的意味合いの強い場へと機能が変化していることを示している。また幼児の発達や自立・自律は親の保護なしには成り立たない。親は子どもの発達や自立・自律の担い手として、社会にふさわしい人間像の形成・親の描く目標にむかって「しつけ」を行っていくのである。Valsiner（1998）は、子どもが自立した食べ手になるまで、母親は、子どもが何を食べたらいいか、どのような道具を使ったらよいか、どの程度話をしてもよいかといった様々なルールによって決めていると示している。子どもが母乳栄養から自立した食べ手になるまで、母親は食事場面においても子どもに様々なルールを伝える社会化の重要な担い手なのである。生理的・社会的・情緒的発達の度合いは発育により変化しながらも、子どもの「食」の機能は相互にバランスをとりあい、親のしつけの下で子どもは健やかに発達、そして社会の担い手となり自立・自律していくのである。

しかし近年、社会変化の中で、このような「食」の機能のバランスがとれず、子どもの心身の発達に影響が及んでいる。

第1に食生活スタイルの変化による身体的発達への影響である。国際化・近代化する社会の中で人々の食事内容・嗜好・摂取の仕方も変化し、豊かで便利な社会は運動不足や身体的能力の低下を促している。坂本（1995）は近年、子どもの肥満、高脂血症、高血圧、糖尿病など、身体面の異常をもった子どもが増加をしていることを示し、このような慢性疾患の多くは、日常生活、とくに食事の不規則さや偏りといった要因がもとになっているとしている。

第2に、親の子どもへのしつけ意識の変化による心身の発達への影響である。現在わが国は少子化が進み合計特殊出生率は1.33（2002）となった。子どもは授かるのではなく、つくる時代へと変化し、子どもの将来や教育方法もある程度親の設計の元で進められている。学習教育においては少ない子どもをよりよく育てる為に塾通い・稽古事等、親の教育重視傾向がある。しかし、社会的な評価をされにくい食に対してのしつけは学習教育同様に教育熱心な親ばかりではなく「食事だけは手を抜こう」と二の次とするケースも多いと思われる。足立（2000）は、子どもの食事のとり方と家族関係について研究を行い、子どもの食に無関心な親、過干渉の親、子どもの主張を全て受け入れる親等と取りあげ、親との関わり方を含めた子どもの食事のとり方の実体を明らかにしている。また子どもの孤食・偏食傾向が年々強くなってきていることも示唆している。食事の親子のコミュニケーションのあり方は心理的な健康にも影響を及ぼす。平井・岡本（2001）は、食事の内容といった物理的な要素だけでなく、家族内コミュニケーションのあり方という心理的な要素がそろって、雰囲気の良い食事

場面が成立し心理的な健康性の重要な要因となることを示している。

このような子どもの食の問題、それと並行して進む食のグローバル化による食文化崩壊や自給率の低下等「食」の問題を改善すべく、現在「食育」として食の教育活動が活発化している。

社会の変化と共に日本の食の教育は変化している。我が国の「栄養教育」は第二次世界大戦終了後、国民の低栄養状態の改善を目的としてスタートした。次に昭和 40 年代にかけて、国民は過剰栄養状態に突入し、食の専門家による指導は、栄養の過不足等の栄養素レベルの指導が中心であり、食文化やマナー等の食環境については家庭でしつけるものとして継承されてきた(坂本, 2001)。しかし、現代の子どもの「食」の問題は栄養素レベルの指導だけでは解決できず、食環境(食を通したコミュニケーション等)を含めた教育が必要とされ、栄養素レベルから食事作りや食環境までの教育(食育)が進められているのである。先進諸国でも栄養素レベルだけではなく食文化や環境を含めた活動が進められている。イタリアでは「スローフード」と呼ばれ自国の食材や食文化を見直す活動が、フランス、デンマーク等の先進諸国でもグローバル化の中で食の乱れ(eating disorder)が生じ「食育」が行われ始めている(新村・猪瀬, 2001)。

「食育」という言葉自体は決して目新しいものではなく『食道楽』の著者、村井弦斎(1863-1927)が約 90 年前に「料理心得の歌」の中で「小児には徳育よりも智育よりも体育よりも食育が先き」と提起していた(加藤, 1998)。また加藤(1998)は知育・徳育・体育を総合していく基盤に撫育(スキンシップ)的な要素や「しつけ」を含めた食育がまず存在するといっている。「食育」は栄養の教育だけではなく、生命や文化等、食環境を含めた教育として進められているのである。2002 年から実施された「総合的な学習の時間」では人と食物や食文化等を題材として「食」について学ぶ事も始まっている。また農林水産省では『食』と『農』の再生プラン(2002)の中で「食育」を推進し、「食の安全運動国民会議」を発足させている。更に平成 15 年度農林生産予算概算決定の概要でも「食育」は重点事項として位置づけられている。(農林水産省ホームページ, 2003 年 3 月現在)

2. 目的

人として生きるということはその社会の文化を生きることである(北山, 1998)。「食の文化」の本質は、食べ物や食事に対する態度を決めている精神の中にひそむもの、すなわち人々の食物に関する観念や価値の体系である(石毛, 1999)。その食物に関する観念や価値の体系は、社会の変化により少しずつ変容し、新たな食文化を作りだしていくと思われる。よって親の食の子どもへのしつけ意識や食の価値を把握する事は、現在の食文化や食環境の動向を把握する事と同時にそこで生じている様々な問題の解決の手助けとなり、より円滑な食育活動を進められるのではないかと思われた。また、母親が子どもにしつける際その方略や行動に日本とアメリカにおいて差がみられる(東・柏木・ヘス, 1981)ことから、人の行動や心理、道徳の差は文化によって異なる。

そこで本研究では(食のとらえ方は数多くあるが)料理等の物質的な違いではなく、次代を担う子どもの「食行動」に大きく起因する親のしつけ意識を日本と異なる文化を有する国と比較検討し、現在の日本の食事場面におけるしつけ意識の特徴を把握することを目的とした。

3. 比較対象国・マレーシア

マレーシアはマレー系・中国系・インド系の3民族からなる複合民族国家である。マレーシアはここ数年平均5~7%のGDP成長率を示し、急激に社会が変動している国である。マレー系が信仰するイスラム教は禁酒及び豚肉を食することが禁止されている。中国系では特に禁止されている食べ物は無いが、信仰する宗教(主として仏教)において暦等の行事により推進及び禁止される食物がある。インド系では主に信仰するヒンドゥ教により牛が敬われ食することを禁止されている。これら3つの民族が同じ国で暮らしているため、市場ではマレー系が飲食可能な物にマーク(HALALマーク)を明示する等して、それぞれの民族が文化を共有・維持しているものと思われる。しかし、急激な社会経済の開発によって都市部の街並みにはファーストフードが立ち並び、若い世代を中心に賑わいをみせ、食事に由来する慢性疾患が増加(日本栄養・食料学会, 1998)し、食も欧米化している状況にある。その変動の中で親の子どもに対するしつけ意識は如何なるものなのか、日本との社会状況の差は食事場面におけるしつけにどのような違いを示すのか把握することとした。

方 法

日本及びマレーシアの都市近郊部に在住する3歳から6歳の子どもをもつ母親(日本100名, マレーシア164名)に協力していただいた。

調査を行うにあたり予備調査を実施した。予備調査をふまえて、2002年8月~10月に質問紙による調査を実施した。質問紙は日本語で作成し、英語, マレー語, 中国語に翻訳した。

日本では、日本語の質問用紙を知人を介して配布、回収は回答者に郵送していただいた。マレーシアでは英語の読み書きが可能な方には英語の質問用紙を優先的に配布した。英語の読み書きが不可能な方には、マレー語と中国語の質問用紙どちらかを選択していただいた。質問用紙の配布及び回収は知人を介して行っていただいた。

質問内容は大きく下記の3つからなる。

(1) 被験者の属性

子どもの年齢, 性別, 子どもの人数, 調査対象の子どもの順位, 子どもが通う施設。

母親及び父親の年齢, 国籍及び民族, 信仰する宗教, 海外生活期間の有無, 学歴, 職業。

(2) 子どもの食事状況・環境

家族で夕食をとる頻度, 子どもの外食頻度, 子どもの共食者, 食事中的子どもの保育者, 子どもの夕食時刻決定要因。

(3) 食事中的しつけを中心とした母親の意識及び態度

東ら(1981)及びベネッセ教育研究所(1998)の質問紙を参考に、特に食事中的母親の意識や態度に配慮した下記の項目を設定した。

(A) 食事中, 子どもに身につけさせたいこと9項目(5段階評定)

(B) 食事中, 子どもが遊びはじめ食べてくれない時の母親の意識9項目(5段階評定)

(C) 食事中, 子どもの困った行動に対する母親の意識・態度10項目(4段階評定)

(D) 子育て全般に対する母親の考え 15 項目 (5 段階評定)

(E) 食事中のしつけについて母親が参考とする情報 (1 つ選択)

結果・考察

1. 質問用紙の回答言語状況

回収した被験者の質問用紙の回答言語は、日本では日本語 100%、マレーシアでは英語 89.6%、マレー語 8.5%、中国語 1.8%であった。

2. 民族の内訳

日本では日本国籍をもつ母親、マレーシアではマレーシア国籍をもち尚且つ民族に対する問いから、Malay (以下、マレー系)、Chinese (以下、中国系)、Indian (以下、インド系) の民族グループに分けることができた。また食事及び生活習慣は文化や宗教により異なる。よって母親の民族と信仰する宗教によるクロス集計を行った結果、それぞれの民族では半数以上が同一の宗教を有する事から(表1)、日本人、マレー系、中国系、インド系、これら4つのグループの比較を行った(表2)。

	母民族				合計
	マレー系	中国系	インド系	日本人	
無回答	1 (1.8)	5 (5.3)	1 (7.1)	12 (12.0)	19 (7.2)
イスラム教	55 (98.2)	1 (1.1)			56 (21.2)
仏教		62 (65.9)		13 (13.0)	75 (28.4)
キリスト教		20 (21.3)	8 (57.1)	1 (1.0)	29 (11.0)
無宗教		6 (6.4)		73 (73.0)	79 (29.9)
神道				1 (1.0)	1 (0.4)
ヒンドゥ教			5 (35.7)		5 (1.9)
合計	56 (100)	94 (100)	14 (100)	100 (100)	264 (100)

() は民族に対する%

表 1 母親の民族における信仰する宗教の人数

	マレー系	中国系	インド系	マレーシア全体	日本人
調査対象母親人数(人)	56	94	14	合計164	100
母親の平均年齢(歳)	32.6	32.8	34.1	平均32.8	34.5
1家族(母親)の子ども数(人) 子ども(人)計/母親(人)計	3	2	1.9	平均2.4	1.9

表 2 母親の民族における人数及び年齢・子ども数

3. 食事中のしつけを中心とした母親の意識及び態度

(1) 結果処理

日本とマレーシアの「食事中のしつけを中心とした母親の意識及び態度」に関する質問のうち(A)～(D)43項目の回答について因子分析を行った。インド系については被験者が14名と少数だった為、この分析から除外した。因子分析は、主成分分析法により7因子を抽出した。7因子による累積説明率は52.1%であった。プロマックス回転後におけるパターン行列の因子負荷量のが.400以上の項目を参考に各因子を解釈した(表3)。第1因子平均得点は<経済的期待・消極的コミュニケーション>とした。尚、因子分析は幾度もパターンを変え収束させたが、第1因子項目は分解されない為、<経済的期待・消極的コミュニケーション>という2つの意味を含む名とした。第2因子平均得点は<(食事のしつけ)母親の役割>、第3因子平均得点は<権力の誇示・温和的しつけ>、第4因子平均得点は<伝統伝達願望>、第5因子平均得点は<高圧的・否定的しつけ>、第6因子平均得点は<個人時間の願望>、第7因子平均得点は<食事中の育児不満>と命名した。プロマックス回転後の7因子について被験者の因子得点を算出し、母親の民族を独立変数とする3水準からなる1要因の分散分析を第1～7因子それぞれについて行った(表4)。第7因子平均得点以外は各母親民族における平均因子得点に有意な差が認められた。

(2) 結果及び考察

<経済的期待・消極的コミュニケーション>

<経済的期待・消極的コミュニケーション>について、Tukeyの多重比較の結果、日本とマレー系、日本と中国系の間には有意差が認められた($p<.001$)。マレー系と中国系の間では有意差は認められない為、マレー系・中国系は併せて日本と比較解釈することとした。

マレーシア(マレー系・中国系)では<経済的期待・消極的コミュニケーション>を高く示した(図1)。現在マレーシアは国民総生産(GDP)の構成において、経済の担い手であった農業から製造業に入れ替わるという変化(第7次マレーシア計画、1996～2000)や貧困者の割合が近隣諸国に比べ低く、特に都市部では急激な発展が進んでいる。また、教育制度も整い、在学率も年々上昇傾向にあり、初等教育101%、中等教育65%の在学率、在学者の女性の割合も半数を占める(ユネスコ、1999)。よって子どもを実用的な働き手として期待するのではなく、社会の発展に伴い社会の担い手として教育を受けさせた上で子どもに経済的支援を期待しているものと思われる。それは、「都市部では核家族化が進み70.3%(1992、マレーシア準国勢調査)を構成しているが、社会保障の確立されていないこの国では拡大家族ネットワークによる支援システム(家族の親訪問・送金)が存在し、子どもへの経済的期待が根強く持たれている(アジア女性交流、2000)」という点からも明らかである。更に食事中のしつけは、母親は子どもとコミュニケーションをもつ場としての意識が消極的である事が示され、食事の第一の目的である栄養充足の場としての意識が高いと思われた。

これに対して日本の母親は食事場面でのコミュニケーションをとる意識が消極的ではなく、子どもへの経済的期待の低さを示したことは、精神的満足ややすらぎを子どもに求めていると思われた。食

日本・マレーシアの食事場面における母親の意識比較

	因子						
	経済的期待・消極的コミュニケーション	母親の役割意識	権力の誇示・温和的しつけ	伝統伝達願望	高圧的・否定的しつけ	個人時間の願望	食事での育児不満
将来子どもから経済的援助を期待している (D)	.862	-.162	.060	-.013	.061	.082	.068
食事中子どもと会話をするのは面倒 (D)	.753	-.073	-.170	.014	.161	.217	.065
自分の老後の面倒は子どもにみてほしい (D)	.751	-.134	.104	.035	.006	.091	.071
食事中は会話を控え静かに食べるものだ (D)	.712	.058	-.111	.015	-.002	-.021	-.112
食事の教育は幼稚園等、家庭以外で学ぶべき (D)	.603	.153	.244	-.090	-.004	.020	-.124
勉強できる子どもに育てたい (D)	.574	.002	.053	.024	.013	.016	.282
間食を与えるのでそのままでよい (B)	.469	.036	.349	-.049	.155	.064	-.232
親の言う事を聞きなさいという (C)	.410	.230	-.105	-.078	.169	-.239	.177
食事を再開させる方法を考える (B)	-.188	.764	.107	.038	-.222	.025	-.214
行儀の悪い子に育ちそうで心配 (B)	.030	.654	.012	-.063	.064	.067	.077
食事中遊ぶのは悪い子である (B)	.091	.608	-.156	-.113	.221	-.110	-.263
食事のしつけは母親の役割 (D)	.371	.416	-.152	.065	-.170	.083	-.141
神様がみてるわよという (C)	-.051	.119	.790	.282	.008	-.064	-.008
子どもの行動を尊重するようにする (C)	.126	-.172	.741	-.021	-.262	.164	-.085
お父さんにしかられるわよという (C)	.031	.238	.425	-.121	.163	-.340	.077
食事の準備や後片付けができる事 (A)	-.031	-.081	.064	.748	.104	.113	-.228
日本及びマレーシアの伝統的食べ方や習慣 (A)	.043	-.039	.141	.738	.034	-.134	.073
両親の食習慣 (A)	.456	.106	.091	.472	-.089	-.119	.005
次の食事まで食べ物を与えない (B)	.080	-.009	-.077	.188	.677	.236	-.119
「ダメ、悪い子ね」等、口で注意する (C)	.167	.000	-.185	-.188	.632	-.008	.011
ぶったり、たたいたりする (C)	.068	-.269	.051	.308	.632	-.272	.045
自分の時間が欲しい (D)	-.029	-.010	.157	.063	.005	.727	.321
しつけについて祖父母に干渉されたくない (D)	.403	.018	-.160	-.096	.040	.643	-.031
食べ物をしばらくおあづけにする (C)	-.298	.172	.280	-.252	.373	.404	.067
今の食事の雰囲気満足している (D)	-.012	.445	-.020	.142	-.050	-.098	-.711
早く食べてほしいとイライラする (B)	-.095	.050	-.430	.107	.063	.105	.634
夫にもっと子どもの面倒をみてほしい (D)	.251	.082	.123	-.001	-.197	.251	.477

因子抽出法: 主成分分析
 回転法: Kaiser の正規化を伴う Varimax 法

表3 日本・マレーシア母親の食事でのしつけ意識

注) (A) ~ (D) は「食事でのしつけを中心とした母親の意識及び態度」に関する質問項目群の質問内容を補足説明したもの

- (A) 食事中、子どもに身につけさせたいこと
- (B) 食事中、子どもが遊びはじめ食べてくれない時の母親の意識
- (C) 食事中、子どもが困った行動をした時、どのようなしつけるのが良いか
- (D) 母親の意識

	マレー系	中国系	日本人	F	df
経済的・消極的	0.74(0.61)	0.57(0.62)	-0.95(0.64)	193.985***	2
母親の役割	0.33(0.84)	0.30(0.74)	-0.47(1.11)	21.109***	2
個人時間の願望	0.86(0.73)	0.05(0.87)	-0.53(0.89)	48.312***	2
権力の誇示温和的	0.15(0.75)	-0.54(0.96)	0.43(0.93)	28.814***	2
伝統伝達願望	0.31(1.03)	-0.04(0.84)	-0.14(1.09)	3.773*	2
高圧的・否定的	-0.49(0.80)	-0.21(1.04)	0.47(0.87)	23.517***	2
育児不満	0.22(0.66)	-0.08(0.82)	-0.04(1.27)	1.74	2

表4 母親の民族における因子得点平均(分散分析結果)

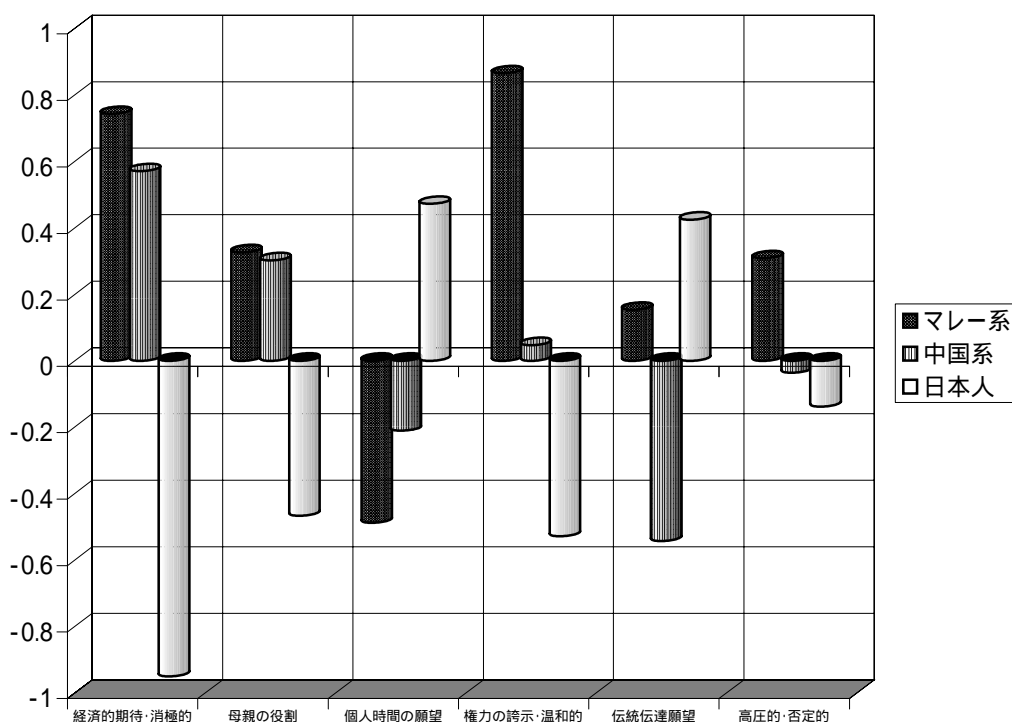


図1 母親の民族による各因子平均値グラフ

事を栄養充足の目的だけでなく、子どもとコミュニケーションをとり食事を楽しむことを、食卓の価値の一つとして意識していると思われた。

第1因子項目は因子分析において分解されず「経済的期待・消極的コミュニケーション」の2つの意味を含みもつ事は、子どもへの経済的期待と食卓におけるコミュニケーションは関連があるのではないかと思われた。マレーシアは急激な発展をしてはいるものの、GDP1人当たり(米ドル)は日本37,556、マレーシア3,840と日本の方が経済的に豊かである(IMF, 2001)。物質的豊かさの向上は、親の子どもへの期待を経済的期待から精神的期待に意向させる。それと同時に、物質的豊かさの向上は生活スタイルも変化させ、食事場面における親の意識も栄養の充足目的だけでなくコミュニケーションややすらぎ等付加価値をもつ場へと変化を示すと思われた。

<母親の役割>と<個人時間の願望>

<母親の役割>について、Tukeyの多重比較の結果、日本とマレー系、日本と中国系の間に有意差が認められた($p<.001$)。マレー系と中国系の間では有意差は認められなかった(図1)。

<個人時間の願望>について、Tukeyの多重比較の結果、日本とマレー系、日本と中国系の間に有意差が認められた($p<.001$)。マレー系と中国系の間には有意差は認められなかった(図1)。これら両因子はマレー系と中国系の間での差が認められない為、マレー系・中国系は併せて日本と比較解釈することとした。

日本ではマレーシアの母親に比べ、食事場面におけるしつけを<母親の役割>とする意識が低く、<個人時間の願望>は高く示された。この両因子の結果は、子育てに対する母親の役割意識が高い日本社会で生じている女性の「個人化(家族の中に私的な心理的空間を求める事)」志向(柏木・永久, 1999)との関連が大きいと思われた為、両因子併せて解釈をした。本調査による母親の仕事状況はマレー系55.4%、中国系63.8%の母親が週30時間以上の就業しているのに対し、日本の70%の母親は専業主婦であった。また食事中の子どもの保育者(表5)結果からも、実質的に日本の母親が子育てに関わる1日の時間はマレーシアに比べ長い。しかし、日本の合計特殊出生率1.33(2002)、マレーシアのそれは3.4(1995)であり、本調査の子どもの数(表2)からも、女性の一生という時間的系列では、日本の母親が子育てに関わる時間はマレーシア人よりも少ないと思われる。このような状況の中で日本の母親は<個人時間の願望>が高く、食事場面における子どものしつけを<母親の役割>と思う意識の低さを示したことは、日本の母親は個人化志向と共に母親の役割意識の葛藤が食事中の育児においても存在していると思われた。

これに対してマレーシアの母親は食事場面におけるしつけを<母親の役割>とする意識が高く、<個人時間の願望>は低く示された。これは、「女性は結婚して子を産み育てる役割のみが期待されていたとされていた(アジア女性交流・研究フォーラム, 1999)」マレーシアの伝統的な<母親の役割>意識を示したものである。またマレーシアでは母親以外の者が子どもを保育するケースも多く(表5)、周囲にサポートされ母親の<個人時間の願望>は低いのもかもしれない。しかし、現在は男女平等教育も進み、性別役割分業否定意識も高まりをみせ(アジア女性交流・研究フォーラム, 1998)、変わりゆく社会の中でマレーシアの女性は性別役割意識に不満を抱え個人化の高まりをみせている

	母民族				合計
	マレー系	中国系	インド系	日本人	
無回答	7 12.5%	15 16.0%	1 7.1%		23 8.7%
母親	29 51.8%	51 54.3%	7 50.0%	93 93.0%	180 68.2%
父親	1 1.8%	1 1.1%			2 .8%
父母	4 7.1%		1 7.1%	6 6.0%	11 4.2%
祖母	3 5.4%	14 14.9%	3 21.4%	1 1.0%	21 8.0%
祖父		2 2.1%			2 .8%
メイド・ベビーシッター	5 8.9%	7 7.4%	1 7.1%		13 4.9%
おばさん		1 1.1%	1 7.1%		2 .8%
その他(子どもの年上の兄弟や家族全員等)	7 12.5%	3 3.2%			10 3.8%
合計	56 100.0%	94 100.0%	14 100.0%	100 100.0%	264 100.0%

下段は各民族に対する%

表5 食事中の子どもの主たる保育者

傾向にあるのではないかと思われる。

<権力の誇示・温和的しつけ>

<権力の誇示・温和的しつけ>について、Tukeyの多重比較を行った結果、日本とマレー系、日本と中国系、またマレー系と中国系の間に有意差が認められた ($p<.001$) (図1)。

主としてイスラム教の信仰するマレー系(表1)では、<権力の誇示・温和的しつけ>意識を高く示した。宗教を要因とする豚肉・酒等の食物制限の点からも、マレー系(イスラム教徒)の食生活及びしつけは宗教の影響を大きく受けていると思われる。マレー系では幼稚園から宗教教育が行われ、それに関する書物も多く出版されている。「Sajian Anugerah Alalh」という子ども向けの本では全ての食物は神アラーの恵みによってであるとされ、またマレーシアで販売されている就学前児用のワークブック「FIQEH」には鶏肉の屠殺方法等が示されている(2000)。このような点から「神」を食事においても崇拜し、また宗教的規範の基で「父親」という権威が存在し、子どもへの慈しみを現すものとしての意識を示したと思われる。

日本は<権力の誇示・温和的しつけ>意識を最も低く示した。日本人がマレーシア(マレー系、中国系)より神や父親等の権威によるしつけ意識が低い事は、本調査で日本人の73%が無宗教と回答した点や、日本の教育において宗教教育が一般化されていない点からも、日本人のしつけ意識は宗教によって直接的に左右されていない事が関係しているのではないかとされた。

中国系においても信仰する宗教をそれぞれ持ち、宗教が生活の中に影響を及ぼしていると考えられる。しかし、中国系が主として信仰する宗教が、どこまで子どものしつけに影響を及ぼしているかについては、本調査では明らかにする事はできなかった。

< 高圧的・否定的しつけ >

< 高圧的・否定的しつけ > について、Tukey の多重比較を行った結果、マレー系と日本との間に有意差が認められた ($p < .05$)、またマレー系と中国系との間においても有意傾向がみられた ($.05 < p < .10$)、それぞれの民族間において有意差が認められた (図 1)。

< 高圧的・否定的しつけ > 意識はマレー系で有意に高く、中国系及び日本で低い結果を示した。この差は、第一に子どもの数が多いほど母の高圧的な統制が強くなり、子どもの数の差によるしつけ方略の違いが考えられる (表 2)。次に、筆者の見聞から民族的教育方針に差があると思われた。それはマレーシア幼稚園を見学し、マレー系では支配的な教育体系であり、中国系では始終和やかで柔らかい雰囲気を感じたからである。また日本の母親は、日米比較では「誤りに対してフィードバックすることは少なく、否定語を使うことは特に少ない」ことを示し (東・柏木・ヘス, 1981)、本調査においてもマレー系・中国系と比べても高圧的・否定的しつけが少ない方略が示された。

< 伝統伝達願望 >

< 伝統伝達願望 > について、Tukey の多重比較を行った結果、中国系とマレー系、中国系と日本との間に有意差が認められた ($p < .001$)。日本とマレー系の間には有意差は認められなかった。

< 伝統伝達願望 > は中国系でマレー系と日本人に比べ有意に低い結果が示された (図 1)。これらの民族間差が生じた理由について、本調査の結果だけでは結論を述べることができない。しかし、中国系では、< 伝統伝達願望 > を低く示した事は、中国系が世界の多くの土地で繁栄する中国人の民族の特性を現したものである。中国人は、世界的にみても華僑をはじめとする移民が多く、現在も主要各国で中国人街が存在するほど繁栄している民族である。マレーシアにおける中国系もそのうちのひとつである。移民であるからこそ、文化伝統の意識は高いと思われる。しかし、生命維持に関係する「食」に関しては、その土地の素材を有効利用し、新たな文化を築く力が大きく、本結果の得点は低く示したのではないだろうか。中国系は宗教的にも食べ物への規制は少なく、獣鳥肉類を例にとっても日本人より常食する種類は多い。多くの食材を使いこなす文化的適応能力の高さと、食材を様々な調理法を用いて使いこなせる文化的技術を高くもつ民族であり、本結果もその現われではないかと思われた。

全体考察

今日食事作りを含めた育児は母親・女性の役割としての意味を大きく持ってきた。しかし、本結果では日本の母親は食卓におけるコミュニケーションを意識し、栄養充足だけではなく精神的やすらぎを求めると同時に、社会変動の中で個人時間の願望と共に母親の役割意識の葛藤をもちながら食に関するしつけを行っている事を示した。コミュニケーションをもちながら食事をとる事は家族における心理的健康性にもつながる (平井・岡本, 2001)。現在、日本の食事はいかようにも手間を省くことができる中食や外食が発展している。よって母親は家族で食事をする大切さや願望をもちながら、個人時間の願望の中で、家族の為にどこまで食事作りに手間をかけ、どのように子どもに食のしつけを

行い、どこで手間を省くか、多くの迷いを有しているのではないだろうか。つまり母親の役割意識の中で家族の栄養充足に関する責任意識が存在すると共に、母親自身の人生をどのように過ごしていくか(家族とのコミュニケーション、個人の時間確保の問題等)の迷いや葛藤があると思われた。

マレーシアの母親においては日本に比べ宗教規範や母親の役割意識は高い結果を示した。しかし、食事のしつけには多くの不満と葛藤が混在すると思われた。日本の食事教育の時代的変容(栄養教育から食育へ)の点、先進諸国で食全体の環境教育に力点が置かれている点、そして本結果が示した物質的豊かさの向上が食事場面における親の意識を子どもの栄養の充足目的だけでなく、コミュニケーションややすらぎ等の付加価値をもつ場へと変化させる点からも、マレーシアにおいても、社会の急激な発展と向上は、今後食を通じた心の問題や文化等の食環境の問題へと変化していくと思われる。

社会変動や物質的豊かさの背景にはグローバル化という名のもとに食の欧米化が潜んでいる。民族固有の食文化はその風土や環境により培われ伝達されてきたものである。それは単なる伝統の伝達ではなく、その民族に適したものとして生命・健康維持としての意味も含むと思われる。食が欧米化することは身体的弊害の点からもよい点ばかりとは思われない。人・子どもにとっての食とは何か人・子どもにとっての食は何が重要か、さらに検討し再認識していく必要があると思われる。また、経済状況と母親のしつけ意識については、今後、より効果的な指導を行う為にもインド系マレーシア人を含む他文化社会や欧米社会等の異なる社会状況での検討が必要に思われた。本研究の日本の母親は70%が専業主婦であった。女性の就業化や社会参加が進む現在、仕事をもつ母親についての検討も必要と思われた。

引用文献

- (財)アジア女性交流・研究フォーラム専門委員会.(1998). *現代マレーシアにおける「中間階層」の研究*. 福岡:(財)アジア女性交流・研究フォーラム.
- (財)アジア女性交流・研究フォーラム.(1999). *マレーシアとシンガポールにおける女性と政治*. 福岡:(財)アジア女性交流・研究フォーラム.
- (財)アジア女性交流・研究フォーラムマレーシア国立人口研究所.(2000). *マレーシアの経済開発と家族及びジェンダー*. 福岡:(財)アジア女性交流・研究フォーラム.
- 東洋・柏木恵子・R.D.ヘス.(1981). *母親の態度・行動と子どもの知的発達*. 東京:東京大学出版会.
- 足立己幸・NHK「子どもたちの食卓」プロジェクト.(2000). *知っていますか子どもたちの食卓*. 東京:日本放送出版協会.
- 生野照子.(1989). 親子関係と食. *心身医学*, **29**(3), 278-283.
- 石毛直道.(1999). *講座 食の文化*. 東京:(財)味の素食の文化センター.
- 石原大道.(1991). *仏教・キリスト教・イスラーム・神道 どこが違うか*. 東京:大法輪閣.
- 柏木恵子・永久ひさ子.(1999). 女性における子どもの価値. *教育心理学研究*, **47**, 170-179.
- 加藤純一.(1998). 「食育」と「食学」. *食の科学* (12月号), (pp.22-28). 東京:光琳

- 北山 忍. (1998). *自己と感情*. 東京：共立出版.
- 坂本元子. (1995). 子どもの成人病危険因子と食物摂取の動向. *臨床栄養*, **87** (1), 32-35
- 坂本元子. (2001). 食教育の日米比較. 江原絢子(編), *食と教育* (pp.112-132). 東京：ドメス出版.
- 新村洋史・猪瀬里美. (2002). *人間形成と食育 食教育*. 東京：芽ばえ社.
- 総務省統計局・統計研修所. (2002). *世界の統計*. 東京：財務省印刷局
- 外山紀子・無藤隆. (1990). 食事場面における幼児と母親の相互交渉. *教育心理学研究*, **38**, 395-404.
- 日本栄養・食料学会. (1998). *世界の食事指針の動向*. 東京：建帛社.
- ベネッセ教育研究所. (1998). 「子育て生活基本調査報告書」研究所報 Vol.14. 東京：ベネッセコーポレーション.
- 労働大臣官房国際労働課. (2000). *海外情勢白書*. 東京：日本労働研究機構.
- Ilmiah publishers Sdn. Bhd. (刊行年次不明). *Sajian Anugerah Allah*. Petaling Jaya: Ilmiah publishers Sdn. Bhd.
- Valsiner, J. (1997). *Culture and the Development of Children's Action*. John Wiley & Sons Ltd.
- Pusat Pendidikan Andalus. (2002). *ASAS FIQEH K2 program Bimbingan Pra-Sekolah*. Singapore: Pusat Pendidikan Andalus.

<謝 辞>

調査の実施にあたり，S. T. Lim 氏，蔡陽熙氏，日本及びマレーシアの母親の方々をはじめ多くの皆様にご協力いただきましたことを心よりお礼申し上げます。また，質問用紙翻訳にあたり，マレーシア在住の杉田たつ子氏，Mrs. Mourney，Mrs. Sara，白鷗大学教授 蔡柱國先生には，お忙しい中ご尽力いただき厚くお礼申し上げます。

最後に本研究にあたり，清泉女学院大学教授（前文京学院大学大学院教授） 東 洋先生には，終始ご指導いただきましたことを，心から感謝申し上げます。

